1. 2009～2013 年度の事業報告

活動の概要

○ 2013 年度業務計画書

国際常民文化研究機構の活動は、業務計画書に則って遂行される。本年度の業務計画書は、資料編に掲載されており、それを参照のこと。

○ 2009～2013 年度の活動概要

国際常民文化研究機構は、国家・民族の枠組みを超え、いずれの社会においても大多数を占める庶民層を「常民」として概念化し、等身大の生活文化を総合的に調査・分析する方法論を確立し、多文化共生社会といわれる現代社会にあって、真の国際理解・異文化理解に資することを目的として、2009 年に文部科学省の認定を得て組織された。

具体的には、日本常民文化研究所の貴重な資料と同研究所の従来の研究を基礎とし、資料整理と公開を第 1 業務として継続しながら、同研究所と関連する共同研究プロジェクトを第 2 業務で展開し、さらに第 3 業務で国際シンポジウムの開催や海外の研究機関との学術協定を締結することによって、常民文化研究の研究ネットワークを形成し、国際的に発展させるという目標を実現してきた。本文は、2009 年度から 2013 年度までの 5 年間の文部科学省認定期間における総体的な活動報告を行う。

（1）第 1 業務「所蔵資料の情報共有化」の 5 年間

第 1 業務では、主に日本常民文化研究所が所蔵する約 30 万枚におよぶ「漁業制度資料」と 1930 年代に渋沢敬三が民俗調査の際に撮影した約 8,000 枚におよぶ写真と 16 ミリフィルム（双方を総称してアチックフィルムと呼ぶ）で撮影した映像資料を整理した。

「漁業制度資料」は、1949 年から 5 年間にわたり当時の水産庁の委託により前身の財団法人日本常民文化研究所が行った全国における漁業資料の筆写稿本であり、その目録作成の資料整理が行われた。この 5 年間では、全体の 3 分の 1 ほどの目録作成が完了し、それをデータベース化して、国内外の研究者コミュニティに公開、共有化することによって、新たな研究分野の開拓とさらなる研究の進展、深化を図った。

この作業は、二つの側面において学術的に大きく発展した。その一つは、第 2 業務の共同研究プロジェクトとの協働である。共同研究「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」グループに対し、島根県、青森県、長崎県等の資料をデジタル化して提供し、その研究の進展に寄与した。もう一つは、現在「神奈川大学デジタルアーカイブ」の構築を行っており、その中に日本常民文化研究所資料として「漁業・漁村筆写資料データベース」を組み込むことでこの作業が進められている。

もう一つの作業は、アチックフィルムの整理である。写真については「粗目録」が存在し、それをもとに撮影日や撮影地、撮影者を同定した「本目録」を作成していった。この同定作業は、渋沢の旅譜を基軸に、アチックミューゼアム同人の著作物を精査した結果を加味して、彼らの移動と調査活動を一覧する表を作成したうえで、個々の写真が撮影された状況を推定するもので、撮影場所

の現地調査を行って作成していった。その過程で、地域ごとに精選した写真をまとめた冊子体の写真集『神奈川大学日本常民文化研究所アチック写真』（以下『アチック写真』）を継続的に刊行した。この 5 年間で、7 冊刊行された。

この現地調査は、第 2 業務の共同研究と共同で行われた。後述するが、共同研究プロジェクト「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」の研究グループと 2010 年に薩南十島の調査を行い、それに先駆けて『アチック写真』vol.2「鹿児島県十島村口之島（トカラ列島）」を作成した。この『アチック写真』は、昭和初期に撮影されたその地域の主な写真を掲載し、写真 1 枚ずつに質問項目を書き記している。現地に伺って、現地の方々に集まってもらい、当時の映像上映会を行うとともに当該地域の『アチック写真』を贈呈して、それらの写真に関する様々な情報を収集する。その後、その情報を加えて、アチック写真のデータベースを作成する。こうして作成されたデータベースは、ただ撮影日、撮影地、撮影者を記録するだけでなく、そこに写されているものの内容にまで言及されており、今後の常民文化の研究に大いに有効なデータベースとなる。

2010 年度には、アチックフィルムのデータベース作成担当者と共同研究の研究者とが共同して他地域にも調査に出かけている。台湾屏東県のパイワン族調査を行った。2011 年度は、トカラ列島、台湾台南県・屏東県の調査を行い、さらに韓国木浦大学校島嶼文化研究所と共同で、多島海でのアチックフィルム上映会を行った。

このように、第 1 業務は、日本常民文化研究所における「所蔵資料の情報共有化」であるが、単なるデータベース作成で終わるのではなく、第 2 業務の共同研究プロジェクトと合同調査を行い、さらに台湾や韓国の戦前のフィルムを確認するために、国際的な研究協力も行い、それぞれが有機的に関連して業務を進めたことは有意義に本機構の業務を推進できたと評価できる。

（2）第 2 業務「プロジェクト型共同研究の推進」の 5 年間

第 2 業務は、共同研究プロジェクトの展開であり、のべ 94 名以上の学内外の研究者が参画して 5 年間の共同研究を行った。5 テーマについて 8 つの研究プロジェクトがそれぞれのテーマで研究を遂行した（本誌 26 頁：表 1）。

第 2 業務のスケジュールは、2009 年度から 2011 年度までの 3 年間を調査研究期間とし、2012 年度と 2013 年度を研究成果公開期間とした。前期の 3 年間では、のべ 57 回にわたる研究会と 195 回にわたる調査が実施された。そして、後期の 2 年間で、それぞれの研究プロジェクトが公開成果発表会を実施し、さらに成果報告書を刊行することとし、27 頁の表 2、3 の通り実行された。この成果報告を確認すると、第 2 業務の業務達成度は極めて高いと言う事ができる。

2011 年度からは、新規課題公募プロジェクトの採用が行われ、日本常民文化研究所で行われてきた奨励研究がその中に組み込まれた。その内容は、28 頁の表 4 に記されている。そして、それぞれの研究プロジェクトは、成果報告書を刊行することとなっている。

第 1 業務と提携して研究を進めたプロジェクトについては、前項で述べた。さらに、第 2 業務が第 3 業務と関連させて研究発表することも実行した。

2010 年 3 月に行われた、第 1 回の国際シンポジウムは、「海民・海域史からみた人類文化」と題して、第 1 日目は「漂うクジラ」、第 2 日目は「海民社会と漁業」というシンポジウムが行われた。それに関連させて、第 2 日目の後半に「海民・海域史への展望」と題して、第 2 業務の P1-1 田和班と P1-2 の伊藤班（26 頁の表 1、29 頁の表 2 参照。以下、番号は同様。）がシンポジウムに加わった。それは、『国際シンポジウム報告書Ⅰ』に掲載されており、第 3 業務の国際シンポジウムと第 2 業務の共同研究が、うまく協働できたことを示している。

この協働は、その後も継続し、2010年12月に行われた「“モノ”語り―民具・物質文化からみる人類文化―」と題した第2回国際シンポジウムにおいて、「“モノ”と“ヒト”の人類文化史」という国際シンポジウムの前日に、P2-1プロジェクト・グループによる「民具名称の諸問題」、P2-2「民具からみる東アジアの比較文化史」、P1-3「フネとカラダ」の3つのセクションからなるシンポジウムが開催された。2011年12月には、第3回国際シンポジウムが「“カラダ”が語る人類文化―形質から文化まで―」というタイトルで開催され、その第2日目にP3-1研究プロジェクトによる公開研究会が「海の民俗伝承と祭祀儀礼」のタイトルで開催された。その中で韓国の宗教集団を招へいして「韓国巫女による龍王祭・刀上舞・神将舞の上演」のパフォーマンスが実演され、盛況であった。2012年12月の第4回国際シンポジウムは、「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」と題して開催され、その第2日目にP5-1研究プロジェクトによる「ミンゾク研究の光と影―近代日本の異文化体験と学知―」が開催された。さらに、2014年3月に開催された第5回国際シンポジウムは、「渋沢敬三の資料学―日常史の構築―」と題して行われ、P4-1研究プロジェクトからもシンポジウム・テーマに関係する共同研究者が参加した。ただし、この年度は諸般の事情によりこの研究プロジェクトの公開成果発表会は、その前の2014年2月に行われた。テーマは、「ビジュアル資料と渋沢敬三―アチックフィルム・写真からの展望―」であり、国際シンポジウムのテーマと関連させた報告であった。

このように、第2業務はプロジェクト・グループによる共同研究が主要な活動であったが、それぞれの共同研究が第1業務そして第3業務と有機的に関連し合いながら研究活動を遂行できた。

（3）第3業務「事業運営の総合的推進」の5年間

第3業務は、本機構の運営委員会を中心とした運営と国際シンポジウムの開催、国際ネットワークの構築、公開研究会の実施およびウェブサイトの整備である。運営委員会は、学外委員17名と学内委員13名によって、全体で15回開催された。国際シンポジウムは、前項でのべたように毎年開催され、それぞれ『国際シンポジウム報告書』が刊行されている。

海外研究機関との協定は、海洋研究機関を中心に、中国海洋大学、上海海洋大学のほかに韓国の釜慶大学校、慶北大学校および木浦大学校島嶼文化研究院と学術協定を結び、それぞれの機関と学術交流を行っている。さらに、海洋研究の東アジアにおける共同研究を進めるために、東アジア島嶼海洋文化フォーラムを企画し、2013年度からそれぞれの機関が参加して開催された。

公開研究会は、常民文化研究の展開を企図して、2009年度から5年間の間で10回開催された。

（4）まとめ

このように、第1業務から第3業務の幅広い学術活動を通して、本機構の業務は総合的に相互に有機的な関連性を持ちながら行われ、本機構の事業が有意義に遂行されたと評価できる。さらに、本機構は常民文化研究の国際的な拠点として、所期の目的である日本および中国・韓国などの各大学・研究機関との学術ネットワーク、そして100名以上にわたる常民文化研究の研究者ネットワークを構築することができたことも高く評価することができよう。

（小熊　誠）

1）所蔵資料の情報共有化　業務報告

「国際常民文化研究機構」の事業内容のうち、第1業務「所蔵資料の情報共有化」では、日本常民文化研究所と神奈川大学21世紀COEプログラムの後継組織である非文字資料研究センター（常

民研付置）が所蔵する諸資料を広く社会に公開、提供するため、その情報の共有化と発信を促進することを目的としてきた。中核となる日本常民文化研究所は、1921 年に発足して以来、日本の民俗・歴史に係わる生活文化の資料を日本全国の諸地域で発掘してきた。その中で、現在所蔵している資料としては、「漁業制度資料調査保存事業」による漁業・漁村関係資料が、筆写稿本の形で残され、原稿は約 30 万枚におよぶ。また、1930 年代に渋沢敬三が主催したアチックミューゼアムソサエティ（現在の「神奈川大学日本常民文化研究所」の前身）によって行われた民俗調査の際に撮影された「アチック写真」約 8,000 枚が残されている。他に、常民生活絵引原画、民具の全国調査データベース、民族学振興会関係資料など、世界的にも価値の高い諸資料を収集、所蔵している。

第 1 業務では、こうした諸資料をデータベース化し、国内外の研究者コミュニティに公開、共有化することによって、新たな研究分野の開拓とさらなる研究の進展、深化を図ることを目的として活動してきた。

本機構の活動開始以後、第 1 業務は歴史関係資料と民俗関係資料の二つの部門に分かれ、それぞれの担当者が専門性を活かしながら事業を推進した。2009 年度～2013 年度にかけて進めた主な業務は、歴史関係資料では漁業制度資料のデータベース化、大型漁場絵図の資料化、民俗関係資料ではアチック写真のデータベース化、冊子『アチック写真』の刊行等に関する作業である。以下、１．漁業制度資料、２．アチック写真に分け、報告したい。

１．漁業制度資料

戦後の混乱の余韻の残る 1949 年からおよそ 5 年間にわたって行われた「漁業制度資料調査保存事業」は、水産庁が財団法人日本常民文化研究所に委託して進められた。全国に散在する漁業・漁村資料の収集・保存を企図して、10 名前後の調査員が全国各地の海岸線を歩き、その成果は、約 30 万枚におよぶ筆写原稿と約 6 万 5000 点の寄贈・寄託等資料として残され、いずれも独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所図書資料館と神奈川大学日本常民文化研究所に収蔵されている。国際常民文化研究機構の「所蔵資料の情報共有化」業務では、これらの資料のうち、特に筆写稿本について研究資料としての有効利用の方法を模索しつつ、共同研究班への資料提供を通して、新たな研究課題・利用方法の糸口を得ることを目的に作業を進めてきた。筆写資料には、北は北海道から南は鹿児島まで、約 700 資料群、原稿用紙（250 字）で 30 万枚におよぶ海岸沿いの旧家・漁業協同組合・市町村役場等から収集した近世・近代の漁業・漁村関係資料が含まれている。

（1）2013 年度作業の概要

前年に引き続き瀬戸内海との関連を考慮し、日本海側の京都府の筆写稿本について詳細目録を取り、ウェブサイトでの公開に向けて、全体に目録の整合性を確保するための作業を行った。絵図類のうち、大型絵図については詳細目録の作成に着手した。

（2）共同研究における利用状況

共同研究「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」グループ（代表：島根大学、伊藤康宏、以下 P1-2 伊藤班の略）は、2009 年 8 月から 2011 年までの調査・研究活動を通して、「漁業制度資料」の活用を精力的に模索し、第 1 業務における資料の目録化作業についても、P1-2 伊藤班の研究の進展に合わせて、デジタル化の作業を行い、筆写稿本の複製本を作成して同班の共同研究者に提供した。県別では、島根県、青森県、長崎県等で、中でも長崎県平戸市の「益冨治保家文書」の筆写資料は相当の分量が残されており、複製本を用いての研究の進展は特筆すべきものが

あった。筆写資料は収集されてからすでに60年を越える年月が経過しており、原資料の所在情報については、別に追跡調査を行う必要があるが、P1-2伊藤班の研究活動を通して、一部の筆写資料については、原資料の所在あるいは滅失が確認できたことも成果の一つであろう。研究グループの成果については、『国際常民文化研究叢書』第2巻に詳細がまとめられているのでご参照いただきたい。

（3）日本常民文化研究所の共同研究との連携

2008年度から開始された共同研究「瀬戸内海の歴史・民俗」は、主に瀬戸内海の島嶼を中心に調査が行われてきた。中でも「漁業制度資料」として保管されている「二神漁業協同組合文書」の収集に端を発する二神島調査は、すでに網野善彦の諸論考をはじめとした多くの成果を挙げているが、2009年以来、さらに墓石、民俗調査等に及び、韓国の木浦大学校島嶼文化研究院、上海海洋大学との連携による調査も実施され、島嶼文化をめぐる国際学術交流としても展開した。

その中で、「所蔵資料の情報共有化」業務としては、愛媛県を皮切りに瀬戸内海地域さらには関門海峡を越えて、日本海側に至る海域の資料を整備することを基本目標とした。

詳細は『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』1～4号に掲載されている簡易目録をご覧いただきたい。

（4）大型漁業絵図資料の資料化

日本常民文化研究所には、筆写資料とともに、各漁村の調査の際に収集したと思われる漁場図等の絵図類が残されている。中でも大型のものは、畳4畳ほどの大きさがあり、これまで目録化や写真撮影等の資料化作業は行われていなかった。国際常民文化研究機構の作業として、まず資料全体のデジタル写真撮影を行うことに着手した。大型の絵図の写真撮影は特殊な方法が必要となるため、専門会社に依頼して作業を進めた。

次に、資料の目録化が必要となるが、これまで漁場絵図類の目録作成についての経験がなかったため、試行錯誤の連続となった。通常の大きさのパソコンのモニターでは、かなりの大きさがある絵図写真データの閲覧に支障があるため、大型のモニターを用意した。また、古文書資料については、目録の項目として「所蔵者住所」「所蔵者名」「標題」「年代」「作成者」「宛名」「形態」等を設定するが、絵図類の場合、例えば標題としてどのような内容を盛り込むのか、「作成者」「宛先」をどのように特定するのかといった様々な問題がある。2013年度までの本事業の中では、目録作成は終了しなかったが、今後継続的に作業を進め、漁場図の資料化についての見通しを立てることとしたい。

（5）「神奈川大学デジタルアーカイブ」による情報発信

第1業務によって取り組まれてきた所蔵資料の情報共有化の作業は、漁業制度資料に関してはデジタル化が全体の3分の1程度、目録についてはまだ2割程度しか終了していないが、今後も継続を図る必要がある。成果の発信については、2013年度より開設され、順次整備が整いつつある「神奈川大学デジタルアーカイブ」の「漁業・漁村筆写資料データベース」によって行っている。

また、独立行政法人水産総合研究センターからは、中央水産研究所図書資料館に収蔵されている「漁業制度資料」の筆写稿本に関する概要目録が公開されている。これは663資料群について、資料群ごとに基本情報を集約したものであり、今後の作業を進める上で基礎となる情報であろう。

筆写資料の公開については、当面目録検索を行える体勢を強化していくが、デジタル資料写真の

公開については、原資料の所蔵者を特定し、公開に関する了解を得る作業が残されている。これについては先述の通り、共同研究グループとの連携により、一部の資料群については実施できたが、大半は未着手である。今後の課題としたい。最後に、これまで目録が終了し、「神奈川大学デジタルアーカイブ」によって公開されている資料群の一覧を掲げる。

表 1 「漁業制度資料」（筆写稿本）・目録作成資料群一覧

No.	資　料　群　名	採　訪　地	絵図	稿本番号
1	西中島村役場文書	愛媛県温泉郡中島村		1626～1627
2	中島町役場文書	愛媛県温泉郡中島町		1628
3	二神道夫家文書	愛媛県温泉郡神和村		1629～1630
4	元怒和漁業協同組合文書	愛媛県温泉郡神和村	有	1631
5	二神漁業協同組合文書	愛媛県温泉郡神和村二神	有	1632
6	上怒和漁業協同組合文書	愛媛県温泉郡上怒和村	有	1633
7	藤井家文書	愛媛県西宇和郡川之石町	有	1634～1635
8	川之石町漁業協同組合文書	愛媛県宇和島郡川之石町		1636
9	三好八重家文書	愛媛県西宇和郡四ツ浜村		1637
10	阿倍満家文書	愛媛県西宇和郡三机村		1638
11	奥山義雄家文書	愛媛県西宇和郡三机村		1639
12	山本隆一家文書	愛媛県西宇和郡神松名村		1640
13	宇都宮たね子家文書	愛媛県西宇和郡神松名村		1641
14	二名津区有文書	愛媛県西宇和郡神松名村		1642
15	名取区有文書	愛媛県西宇和郡神松名村		1643
16	井野浦区有文書	愛媛県西宇和郡三崎村		1644
17	大佐田区有文書	愛媛県西宇和郡三崎村		1645
18	佐田区有文書	愛媛県西宇和郡三崎村	有	1646
19	加藤平馬家文書	愛媛県西宇和郡三崎村		1647
20	北灘漁業協同組合文書	愛媛県西宇和郡北灘村		1648～1658
21	谷本保山収集文書	愛媛県西宇和郡八幡浜市		1659
22	三机西若連中所有文書	愛媛県西宇和郡三机村		1660～1661
23	草津魚商仲買組合沿革史	広島県広島市		1485
24	草津水産試験場文書	広島県広島市		1486
25	坂町郷土誌	広島県安芸郡坂町		1487
26	江田島役場文書	広島県安芸郡江田嶋村		1488
27	丸谷義一家文書	広島県安芸郡江田嶋村	有	1489
28	中井壯助家文書	広島県安芸郡江田嶋村		1490
29	音戸漁業組合文書	広島県安芸郡音戸町		1491
30	音戸漁業協同組合文書	広島県安芸郡音戸町		1492
31	倉橋嶋村役場文書	広島県安芸郡倉橋島村	有	1493～1494
32	倉橋島誌	広島県安芸郡倉橋島村		1495～1496
33	下蒲刈漁業協同組合文書	広島県安芸郡下蒲刈島村		1497
34	津田馨家文書	広島県佐伯郡中村		1498～1499
35	佐伯漁業調査	広島県佐伯郡	有	1500
36	野間克郎家文書	広島県佐伯郡沖村		1501
37	幸崎町役場文書	広島県豊田郡幸崎町	有	1502～1505
38	黒川和雄家文書	広島県豊田郡吉名村		1506～1507
39	吉名村役場文書	広島県豊田郡吉名村		1508～1509
40	高橋駒之輔家文書	広島県豊田郡豊浜村		1510
41	大崎下島漁業協同組合文書	広島県豊田郡豊浜村		1511～1512
42	大崎村役場文書	広島県豊田郡大崎南村		1513
43	正畑規矩家文書	広島県豊田郡大崎南町		1514
44	郡中島浦覚書	広島県		1515～1516
45	安岡漁業協同組合文書	山口県下関市		1517
46	吉見漁業協同組合文書	山口県下関市吉見町		1518
47	江本新家文書	山口県光市	有	1520～1522
48	原安雄家文書	山口県大島郡沖浦村		1523
49	高井家文書	山口県大島郡油田村		1524～1525
50	白木村役場文書	山口県大島郡白木村	有	1526～1529

No.	資　料　群　名	採　訪　地	絵図	稿本番号
51	柳沢家文書	山口県大島郡安下庄町		1530
52	上関漁業協同組合文書	山口県熊毛郡上関村	有	1531～1532
53	佐川助三郎家文書	山口県熊毛郡佐賀村		1534
54	福永房雄家文書	山口県豊浦郡豊西村	有	1535～1537
55	立石漁業協同組合文書	山口県大津郡向津具村	有	1538
56	重岡蔵吉家文書	山口県大津郡向津具村		1540
57	大浦漁業協同組合文書	山口県大津郡向津具村		1541
58	中平菊之助家文書	山口県大津郡向津具村		1542
59	大藤定行家文書	山口県大津郡向津具村	有	1543
60	天野剛家文書	山口県大津郡向津具村	有	1544～1547
61	岡貞四郎家文書	岡山県児島市		1403～1404
62	西尾保平家文書	岡山県児島市		1405～1407
63	荻野休次郎家文書	岡山県児島市		1408
64	高本光雲家文書	岡山県児島市	有	1409～1410
65	赤星昭家文書	岡山県児島市		1411～1415
66	下津井漁業協同組合文書	岡山県児島市	有	1416
67	岡山県児島市味野児島市役所文書	岡山県児島市		1417
68	児島市役所下津井支所所蔵文書	岡山県児島市	有	1418
69	黒崎村共有文書	岡山県浅口郡黒崎村		1419～1420
70	船津儔一家文書	岡山県小田郡神島内村		1421
71	妹尾功家文書	岡山県小田郡神島内村		1422
72	長安凱吉家文書	岡山県小田郡神島内村		1423
73	日生漁業協同組合文書	岡山県小田郡神島内村	有	1424～1436
74	日生町誌	岡山県小田郡神島内村		1437
75	牛窓町役場文書	岡山県邑久郡牛窓町		1438
76	三宅久次郎家文書	岡山県小田郡真鍋島村		1439～1440
77	真鍋漁業協同組合文書	岡山県小田郡真鍋島村		1441～1442
78	山下風美男家文書	岡山県小田郡真鍋島村		1443～1444
79	真鍋島役場文書	岡山県小田郡真鍋島村		1443～1444
80	真鍋増太郎家文書	岡山県玉野市	有	1445～1469
81	真鍋家文書	岡山県		1470～1474
82	真鍋島検地帳	岡山県小田郡真鍋島村		1475～1476
83	真鍋龍太郎家文書	岡山県小田郡真鍋島村		1477～1479
84	真鍋漁業組合文書	岡山県小田郡真鍋島村		1480
85	真鍋島文書	岡山県		1481
86	真鍋漁業協同組合文書	岡山県小田郡真鍋島村		1482～1483
87	真鍋嶋検地帳	岡山県小田郡真鍋島村		1484
88	島根県庁文書	島根県松江市		1360～1364
89	賣布神社文書	島根県松江市		1365
90	桑原赳夫家文書	島根県浜田市		1366～1369
91	濱田御領内村附之覚	島根県		1370
92	島根県那賀郡周布村津摩浦文書	（島根県浜田市）		1371
93	桑原赳夫家文書	島根県浜田市		1372
94	美保関町役場文書	島根県八束郡美保関町		1373
95	鷦鷯義男家文書	島根県八束郡美保関町		1374～1376
96	内田鼎吉家文書	島根県八束郡美保関町		1377
97	八束村役場文書	島根県八束郡八束村		1379
98	福浦漁業協同組合文書	島根県那賀郡三保村		1380
99	湊浦漁業協同組合文書	島根県那賀郡三隅町		1381
100	和泉林市郎家文書	島根県簸川郡北浜村		1382
101	谷田重矩家文書	島根県那賀郡国府村		1383
102	唐鐘漁業協同組合文書	島根県那賀郡国府村		1384
103	池上但馬家文書	島根県那賀郡国府村		1385
104	鈴木芳郎家文書	島根県那賀郡三保村		1386
105	外山楢千代家文書	大阪府堺市深井町	有	1044
106	岸和田高校文書	大阪府岸和田市		1045
107	貝塚漁業協同組合文書	大阪府貝塚市北町		1046
108	田尻漁業協同組合絵図	大阪府泉南郡田尻村	有	1048
109	田尻村役場文書	大阪府泉南郡田尻村		1049

No.	資　料　群　名	採　訪　地	絵図	稿本番号
110	谷口穎璋家文書	大阪府泉南郡田尻村		1040
111	西鳥取漁業協同組合文書	大阪府泉南郡西鳥取村		1051～1058
112	木村九壽雄家文書	大坂府泉南郡西鳥取村		1059
113	深日漁業組合文書	大阪府泉南郡深日町		1060
114	大阪府泉南郡深日漁業調査	大阪府泉南郡深日町		1061
115	津田秀夫　泉州水産史料（藤田健三家文書）	大阪府泉佐野市		1063
116	駒ヶ林漁業協同組合文書	兵庫県神戸市駒ヶ林	有	1064
117	大西秀市家文書（全）漁場・漁業経営雇用関係	兵庫県明石市東二見町		1065
118	東二見漁業協同組合文書	兵庫県明石市東二見町	有	1066
119	室津浦漁業協同組合文書	兵庫県揖保郡室津村	有	1067～1070
120	岩屋漁業協同組合文書	兵庫県津名郡岩屋町	有	1072
121	中谷芳太郎家文書	兵庫県津名郡岩屋町		1073
122	富島町漁業協同組合文書	兵庫県津名郡富島町	有	1075
123	仮屋漁業協同組合文書	兵庫県津名郡仮屋町	有	1076～1077
124	郡家浦漁業協同組合文書	兵庫県津名郡郡家町	有	
125	郡家町役場文書	兵庫県津名郡郡家町	有	1063
126	志智嘉九郎家文書	兵庫県津名郡郡家町		1085
127	春海浩家文書	兵庫県津名郡郡家町		1086
128	鳥飼浦漁業協同組合文書	兵庫県津名郡鳥飼村	有	1087～1090
129	由良町漁業会文書	兵庫県由良町	有	1091
130	仲野九郎家文書	兵庫県三原郡阿那賀村	有	1093～1099
131	福良漁業協同組合文書	兵庫県三原郡福良町		1100
132	沼島漁業協同組合文書	兵庫県三原郡沼島村		1101
133	阿万町漁業協同組合文書	兵庫県三原郡阿万町	有	1102
134	塩飽島中共有文書	香川県仲多度郡本島村	有	1573～1609
135	泊浦部落共有文書	香川県仲多度郡本島村		1610
136	桐山鍋市家文書	香川県仲多度郡本島村		1611
137	藤井致一家文書	香川県仲多度郡本島村		1612～1617
138	宮本秀太郎家文書	香川県仲多度郡本島村		1619
139	吉田薫家文書	香川県仲多度郡本島村		1621
140	宮本傳吉郎家文書	香川県仲多度郡本島村		1622
141	石川家文書	香川県仲多度郡本島村		1624
142	大前源吉家文書	香川県仲多度郡與島村		1625

＊上記の「稿本番号」は、日本常民文化研究所保管の筆写稿本の番号

（田上　繁）

２．アチック写真

（１）アチック写真およびアチックフィルム

神奈川大学日本常民文化研究所には、アチックミューゼアムの同人たちが主に調査旅行の際に撮影した写真と動画が所蔵され、それぞれアチック写真およびアチックフィルムと呼ばれている。撮影年代の最古のものは大正 2（1913）年に遡るが、大正末年から昭和 10 年代のものが大半を占める。撮影地は、離島を含む日本各地の山村や漁村の他に、台湾や朝鮮半島といった当時の植民地にもおよぶ。総量はアチック写真が約 8,500 点、アチックフィルムが 16 ミリフィルムで 23 作品 30 本である。

アチック写真粗目録（2011 年 5 月 29 日改訂）については、『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』2（以下『年報』）32～41 頁参照。

（２）情報共有化に向けた作業

本事業では、これらの映像資料を内外の研究者と共有化するために、データベースを構築し、デジタル化した写真をウェブページに掲載して、また、適時に冊子体の『アチック写真』を刊行して順次一般に公開してきた。

財団法人日本常民文化研究所から引き継いだ写真は、上記の「粗目録」に示したように、撮影機会ごとにアルバムに綴じられたものが120冊約4,000点、印画紙にプリントされたものやネガフィルムあるいはガラス乾板といった単体のものが約3,500点あった。加えて、財団から大学に移籍した故河岡武春氏のコレクションにも、関連する写真が若干含まれていた。これらの写真について、まずアルバムや封筒単位で「粗目録」を作成し、背表紙や封筒の表書きを頼りに資料群全体の概要を把握した。つぎに、写真一枚ごとに台紙や裏面に記された文字情報を集め、また、寸法などの形態的特徴を記録した仮目録を作成した。

これを土台にして、撮影日や撮影地、撮影者を同定したものが「本目録」である。同定作業では、渋沢の旅譜を基軸に、アチック同人の著作物を精査した結果を加味して、彼らの移動と調査活動を一覧する表を作成したうえで、個々の写真が撮影された状況を推定していった。この過程で明らかになった出版物への掲載や、アチックフィルムの被写体との重複も本目録には記載してある。また、アチック同人が撮影した写真は、国立民族学博物館や渋沢史料館、宮本記念財団、国文学研究資料館も所蔵しており、これら他の研究機関の所蔵する同一写真についての情報も本目録に充当した。具体的な作業内容については、2010年度『年報』2（24～27頁）に詳細な記述がある。

（3）成果物：データベース『アチックミューゼアムにおける写真資料』

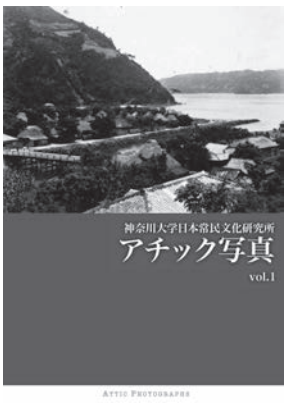
図1　アチック写真　ウェブサイト（2011年8月閲覧）
http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/

上記のような一連の作業を終えた写真は、一枚ごとに検索用のタイトルを付して、目録情報とデジタル画像をウェブページに順次掲載した。この『アチックミューゼアムにおける写真資料』が完成版のデータベースである（図1）。

2010年2月の運用開始から2014年3月末までに34カ国から9,152セッションのアクセス、23,591回のページビューがあった。運用を開始した2010年中にはやくも一般公開の反響があったことを付記しておきたい。インターネットを通じて出生地の写真を目にした閲覧者が、撮影地が不詳となっているため本事業に情報を寄せ、旅譜との照合により撮影日も明らかになった（詳細は『神奈川新聞』平成22（2010）年6月22日）。

（4）成果物：冊子『アチック写真』

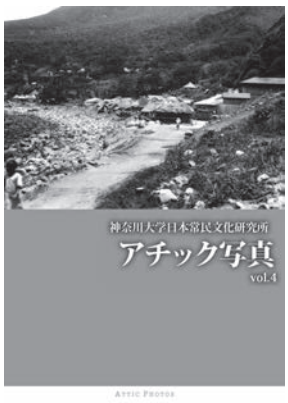
ウェブページ上のデータベースに加え、そこから精選した写真を地域ごとにまとめた冊子体の写真集『アチック写真』を継続的に刊行した。編集にあたっては、国際常民文化研究機構の共同研究班が現地調査で活用することを念頭に一部の巻は質問形式にした。関係機関へ送付した他に、ウェブページを通じてPDF版の提供をしている。各巻に収録された写真の主要な地域は図2のとおりである。



Vol.1　鹿児島県大島郡大和村（奄美大島）　神奈川大学日本常民文化研究所発行

Vol.2　鹿児島県鹿児島郡十島村口之島（トカラ列島）

Vol.3　香川県、愛媛県、岡山県、広島県、山口県を中心とした瀬戸内沿岸地域

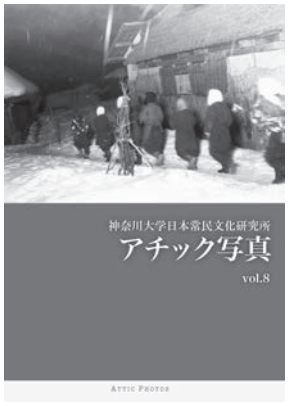


Vol.4　鹿児島県鹿児島群十島村中之島（トカラ列島）

Vol.5　愛媛県、岐阜県、長野県を中心とする三信南遠地域、および奈良県、三重県、和歌山県を中心とする吉野・熊野地域

Vol.6　島根県隠岐島

Vol.7　伊豆諸島



Vol.8　新潟県三面岩船郡三面村

図２　写真集『アチック写真』Vol. 1～8

（５）公開写真の利用について

情報共有化に向けた作業の進展と並行して、国際常民文化研究機構の共同研究班によりアチック写真の積極的な活用がはかられ、また、公開にともなって一般の利用頻度も高まった。

①神奈川大学国際常民文化研究機構・共同研究での利用

◆ 2009 年度

研究グループ 3-1.　アジア祭祀芸能の比較研究

アジアの祭祀芸能の比較研究のため、2009 年 12 月 12 日に神奈川大学で開かれた研究会において、昭和初期に撮影された奥三河花祭に関するアチック写真および 16 ミリフィルムの上映と内容解説をおこなった。翌日には、これらの資料に関わる愛知県東栄町中在家の花祭を調査した。

研究グループ 4-1.　アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

昭和 9（1934）年 5 月に行われた薩南十島（トカラ列島および奄美大島）調査の写真のうち、口之島に関する 45 点を、現地での追跡調査のために『アチック写真』vol. 2 にまとめた。2010 年 3 月 22 日から 25 日に同島を訪れ、十島村立口之島小学校にてアチック撮影の 16 ミリフィルム映像とあわせて写真の上映会をおこなった際に、写真集を用いての聞き書き調査もおこなった。

図 3　口之島での上映会の様子

◆ 2010 年度

研究グループ 1-3.　環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究

昭和 9（1934）年 5 月に行われた薩南十島（トカラ列島および奄美大島）調査の写真のうち、マルキブネ、イタツケ等の、伝統的技術によって建造された船が写っているものを選び、その建造及び運用方法について、2011 年 1 月 20 日～30 日に、トカラ列島の小宝島と中之島の住民から聞き書き調査をおこなった。

研究グループ 4-1.　アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

昭和 9（1934）年 5 月に行われた薩南十島（トカラ列島および奄美大島）調査の写真のうち、中之島に関する 69 点を、現地での追跡調査のために『アチック写真』vol. 4 にまとめた。2011 年 3 月 18 日から 21 日に同島を訪れ、十島村役場中之島支所（コミュニティセンター）にてアチック撮影の 16 ミリフィルム映像とあわせて写真の上映会を実施した際に、写真集を用いて聞き書き調査もおこなった。

図 4　中之島での上映会の様子

研究グループ 2-2. 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史
研究グループ 4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象
研究グループ 5-1. 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学

2010 年 12 月 26 日から 29 日にかけて、3 班合同で台湾屏東県の山地を訪問し、昭和 12（1937）年にアチックの宮本馨太郎と小川徹、および当時台湾で調査をしていた鹿野忠雄の 3 人によるパイワン族調査で撮影された、16 ミリフィルムおよび写真を上映し、聞き書き調査をおこなった。

図 5　屏東県泰武郷での調査の様子

◆ 2011 年度

研究グループ 1-3. 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究

2011 年 5 月 19 日から 29 日、9 月 10 日から 20 日、2012 年 1 月 28 日から 2 月 7 日のそれぞれにおいて、渋沢敬三らのアチック薩南十島調査団撮影の写真のうち、各島に於ける島民、マルキブネ、イタツケ等が写っているものを選び、その建造方法及び運用方法について、トカラ列島で調査をおこなった。

研究グループ 4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2011 年 7 月 16 日から 17 日に国立民族学博物館において、共同研究会を開催し、あわせて民博の収蔵標本資料に関する調査を実施した。アチック調査団による「薩南十島」（トカラ列島）調査（1934 年）の口之島と中之島に地域を限定し、写真・16 ミリ映像に記録されているモノと、現在、国立民族学博物館に収蔵されている当時の収集品（モノ）の対応関係の調査をおこなった。

図 6　アチックフィルム『十嶋鴻爪』（口之島）の一部（左）、民博・標本番号 H0016601 資料との対応調査（右：撮影／高城玲）

研究グループ 4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2011 年 12 月 16 日から 20 日にかけて、台湾台南県・屏東県を訪問し、昭和 12（1937）年にアチックの宮本馨太郎と小川徹、および当時台湾で調査をしていた鹿野忠雄の 3 人によるパイワン族調査で撮影された 16 ミリフィルムおよび写真を現地の人に見てもらいながら、当時やその後の状況に関する聞き取り調査をおこなった。

図 7　屏東県泰武郷でのフィルム上映調査 撮影／高城玲

研究グループ 4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2012 年 3 月 26 日から 29 日にかけて、2010 年度の口之島調査、2011 年度の中之島調査の補足調査をおこなった。それぞれの島では、前回の上映会時に当時の映像に関する情報を寄せてくれた高齢者を中心に戸別訪問を行い、より詳細な聞き取り調査をおこなった。

図 8　アチック写真　目録番号：ア-10-77「中之島の島中社」（左）、現在の島中社（右：撮影／高城玲）

研究グループ 2-2.　東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史
研究グループ 4-1.　アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象
研究グループ 5-1.　第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学

2012 年 2 月 12 日から 16 日にかけて、渋沢敬三 50 年忌記念事業の一環として財団法人 MRA ハウスから助成を受け、また、共同研究 3 グループ、日本常民文化研究所、渋沢史料館など、多くの関係機関やプロジェクトから参加し、国際常民文化研究機構と学術交流協定を結んだ木浦大学校島嶼文化研究院とともに「昭和 11 年アチック多島海探訪の検証」として調査をおこなった。

図 9　草墳（チョブン）（左）、アチック写真中に母親に抱かれる本人（右）写真撮影／泉水英計

◆ 2012 年度

研究グループ 2-2.　東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史

『国際常民文化研究叢書 3』、太田心平「写真のマテリアリティ―現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論―」に「蔚山洋靴店前で布を売る人々」（目録番号　ア-61-14）、「街中で布を売る人々」（目録番号　ア-61-15）が掲載される（2013 年 1 月 16 日貸出、2013 年 2 月 28 日）。

研究グループ 4-1.　アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2012 年 9 月 15 日の国際常民文化研究機構公開成果発表会にてアチックミューゼアムの朝鮮多島海・パイワン調査発表（羽毛田智幸）。（目録番号　ア-18-48-1、ア-63-3・4、ア-64-3・10・19・33、ア-65-10、ア-73-4・26・29-1、ア-74-4、ア-78-11・18・22、河　岡 1-6-14・15、河　岡 1-26-8、写 1-6-49、写 1-9-34-2、写 1-19-2-1、写 3-24-9、写 3-41-7、写 4-2-5-5、2012 年 9 月 10 日貸出）

◆ 2013 年度

研究グループ 4-1.　アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2013 年 6 月 29～30 日、渋沢史料館での共同研究会へ資料提供。7 月 1 日、共同研究者（原田健一）の来所による調査。2014 年 2 月 22 日、公開成果発表会『ビジュアル資料と渋沢敬三―アチックフィルム・写真からの展望―』での発表資料提供。

研究グループ 2-2.　東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史

2013 年 10 月 18 日、共同研究者（鈴木文子）による日本統治期の朝鮮に関する調査。

②資料閲覧

◆ 2009 年度

ソウル大学校　社会科学大学人類学科（2009 年）

昭和 11（1936）年 7 月～ 8 月のアチック朝鮮多島海調査、およびアチック同人と東京帝国大学医学部学生らによる蔚山村達里における衛生調査時のアチック写真の閲覧をおこなう。

◆ 2010 年度

秋田大学　大学院医学系研究科（2010 年 6 月 11 日）

アチック同人の吉田三郎に関する資料の所在調査にあたり、アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

蔚山大学校　歴史文化学科（2010 年 11 月 18 日）

アチック同人と東京帝国大学医学部学生らによる蔚山村達里における衛生調査時のアチック写真の閲覧をおこなう。

青山学院大学　総合文化政策学部（2010 年）

今和次郎に関する資料の所在調査にあたり、アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

◆ 2011 年度

高麗博物館（2011 年 6 月 28 日）

企画展「絵はがきで知る朝鮮―1945 年まで―」に関して、アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

近畿大学　文芸学部（2011 年 8 月 5 日）

台湾研究に関して、アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

国立歴史民俗博物館　研究部民俗研究系（2011 年 10 月 26 日）

展示室リニューアルに関して、渋沢敬三とアチックミューゼアムの調査・活動に関するアチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

飯田市美術博物館（2012 年 1 月 19 日）

柳田國男没後 50 年記念企画展「民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信―柳田國男・折口信夫らによる調査研究のあゆみ―」に関して、アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

東京都新島村教育委員会　新島村博物館（2012 年 2 月 21 日）

展覧会に関して、新島・式根島関係のアチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

◆ 2012 年度

人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館（2012 年 8 月 7 日）

民俗展示に関してのアチック写真閲覧。

株式会社アイシーエムケイ（2013 年 1 月 25 日）

NHK BS プレミアム 2013 年 3 月 30 日放送「極上アンティークお宝映像発掘！『ムカシネマ』」で放送される大正、昭和（戦前）の古いフィルムの調査のため、アチック写真、アチックフィルム等、写真・動画資料閲覧。

東北大学　東北アジア研究センター（2013 年 2 月 21 日）

古写真を利用した民俗調査のための事前調査のため、アチック写真、アチックフィルム等、写真・動画資料閲覧。

松戸市立博物館　青木俊也（2013 年 2 月 22 日）

青木俊也『あるく民俗・あるく展示』（神奈川大学評論ブックレット）掲載の写真確認のため、アチックフィルム動画資料閲覧。

◆ 2013 年度

佐々大河（漫画家）（2013 年 10 月 18 日）

漫画制作の作画資料として閲覧。

蔚山博物館（韓国）（2013 年 10 月 29 日）（蔚山博物館学芸員）

同館学芸員の崔賢淑が来所、蔚山博物館（編）「蔚山達里写真集（仮題）」刊行のための調査。資料集刊行にあたっての確認事項を協議。

③資料掲載等

◆ 2009 年度

『ホライゾン』（2009 年 10 月 20 日）

奄美情報誌『ホライゾン』第 30 号、高坂嘉孝「幻の喜界馬（喜界町獣医）」の項に「砂糖黍運搬に馬に乗って行く人」（目録番号　ア-8-2）が掲載される。

◆ 2010 年度

『博物館学人物史』上（2010 年 7 月 16 日）

青木豊・矢島國雄編『博物館学人物史』上、落合知子「澁澤敬三」の項に「アチック・ミューゼアムの屋根裏の様子」（目録番号　写 4-1-7-2・河 1-6-6）が掲載される。

鹿児島県十島村立口之島小学校（2010 年 10 月 27 日）

鹿児島県十島村立口之島小学校創立 80 周年記念式典において、会場内に『アチック写真』vol. 2 を展示、また、記念冊子に「口之島の高倉」（目録番号　ア-10-25）が掲載される。

第 14 回常民文化研究講座「遠野から日本・アジア・世界へ」（2010 年 11 月 6 日）

岩手県遠野市で開催された日本常民文化研究所の第 14 回常民文化研究講座「遠野から日本・アジア・世界へ」において、「男鹿、能代、藤琴、石神、八戸」と「田中喜多美氏藁靴製作」の 2 本の 16 ミリフィルム、およびオシラサマや藁靴製作などのアチック写真が上映される。

『季刊地域』（2010 年 12 月 13 日）

農山漁村文化協会『季刊地域』4 号、須藤功「宮本常一と観文研の若者たち」の項にアチックミューゼアム外観の写真（目録番号　河 1-6-5・13）が掲載される。

『常民文化』（2011 年 1 月 20 日）

成城大学常民文化研究会『常民文化』34 号、荒一能「瀬戸内海漁村における女性の働き」の項にアチック写真「高見島」（目録番号　ア-100-18）が掲載される。

「縦横山林間―鹿野忠雄」ドキュメンタリー（2011 年 3 月 30 日）

台湾・国史館による映像ドキュメンタリー作品「縦横山林間―鹿野忠雄」およびそれに関する出版物の制作にあたって、昭和 12（1937）年 3 月～4 月に行われたアチックの宮本馨太郎・小川徹と鹿野忠雄のパイワン族調査に関する写真の閲覧・貸出をおこなった。

◆ 2011 年度

『博物館学事典』（2011 年 6 月 23 日）

全日本博物館学会編『博物館学事典』、内川隆志「アチック・ミューゼアム」の項に「アチック・ミューゼアムの屋根裏の様子」が（目録番号　写 4-1-7-2）が掲載される。

高麗博物館　企画展「絵はがきで知る朝鮮」（2011 年 8 月 3 日～10 月 2 日）

企画展「絵はがきで知る朝鮮」へ「水汲桶とナマグサ桶」（目録番号　ア-15-51）、「焚木をカベル女」（目録番号　ア-18-51-1）、「頭にものを載せ運ぶ女性たち」（目録番号　ア-59-38）、「鎮里のパアチゲと杖」（目録番号　ア-64-18）が展示される。

ブラジル日本文化福祉協会でのセミナー開催に関するチラシ（2011 年 9 月 8 日）

ブラジル日本文化福祉協会で開催されたセミナー開催に関するチラシに「アシナカ」（目録番号ア-82-1）、「斉藤家々族及ビ使用人」（目録番号　写 1-18-12-2）、「下伊那郡神原村本山にて越前出身の炭焼きの男性達」（目録番号　河 1-29-18-2）が掲載される。

蔚山博物館（大韓民国）特別企画展「75 年ぶりの帰郷、1936 年蔚山達里」
（2011 年 11 月 29 日～ 2012 年 2 月 5 日）

特別企画展「75 年ぶりの帰郷、1936 年蔚山達里」（後援：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館）へ、「朴容文氏の家屋」（目録番号　写 1-9-9-1）、「家屋前での調査員と現地の人々の集合写真」（目録番号　写 1-9-28-2）、ポートレート（目録番号　写 1-9-33-1～6、写 1-9-34-1～6）「ポートレート、崔應錫氏」（目録番号　写 1-9-34-2）が展示される。また、図録に掲載される。

『海の狩人沖縄漁民―糸満ウミンチュの歴史と生活誌』（2012 年 3 月 19 日）

加藤久子著『海の狩人沖縄漁民―糸満ウミンチュの歴史と生活誌』に「糸満のへぎ舟　石垣にて」（目録番号　ア-119-5-2）、「石垣島のタターチャ」（目録番号　ア-119-7-2）が掲載される。

◆ 2012 年度

新島村博物館『昔の新島・式根島を古写真から見る』展覧会（2012 年 4 月 25 日）

上記展覧会に展示予定のアチック写真（目録番号　ア-15、ア-16、ア-79、河岡 1-7、河岡 1-40）複写寄贈。

『武蔵保谷村だより　第6号』（2012年7月）

下保谷の自然と文化を記録する会『武蔵保谷村だより　第6号』、小林光一郎「KYKとエチオピア皇太子」に「市川信次氏送別紀念」（目録番号　ア-78-11）が掲載される（2012年6月15日貸出）。

鳥取県立博物館講演会「鳥取県の怪談―動物の怪を中心に―」PowerPoint上映（2012年9月9日）

鳥取県立博物館講演会「鳥取県の怪談―動物の怪を中心に―」において（講演者小林光一郎）、「男鹿のナマハゲ」（目録番号　ア-47-6）が上映される（2012年9月3日貸出）。

飯田市美術博物館（2012年9月15日～10月28日）

飯田市美術博物館の企画展「柳田國男没後50年記念企画展　民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信―柳田國男・折口信夫らによる調査研究のあゆみ―」に「下伊那郡神原村伊藤家での記念写真」（目録番号　ア-22-7）、「北設楽郡田口町の馬市にて競り人に囲まれる仔馬」（目録番号　ア-25-18-1）、「北設楽郡本郷町中在家の花祭湯ばやし」（目録番号　河岡1-29-20-2）、「花祭見学の一行」（目録番号　ア-27-4）が展示パネルとして使用され、また図録『民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信―柳田國男・折口信夫らによる調査研究のあゆみ―』（2012年9月15日刊行）に同資料4点が掲載される（2012年7月5日～8月31日貸出）。尚、写真資料ではないがこの時、常民研所蔵「花祭」（早川孝太郎画）も展示、図録・展覧会チラシに掲載されている。

くびき野メディフェス2012（第10回市民メディア全国交流会）分科会
「市民メディアと映像アーカイブ」PowerPoint上映（2012年10月27日）

くびき野メディフェス2012（第10回市民メディア全国交流会）分科会「市民メディアと映像アーカイブ」において（研究報告者原田健一）、アチックフィルム「谷浜桑取谷」（目録番号　F22）が上映される（2012年10月26日貸出）。

『歴史地理研究　799号』（2013年1月1日）

『歴史地理研究　799号』、榎美香「なぜ博物館に民俗展示があるのか、民俗文化財とは何か。」に「アチックミューゼアム新館の内部」（目録番号　ア-78-12）が『屋根裏の博物館―実業家渋沢敬三が育てた民の学問―』（2002年横浜市歴史博物館発行）より転載される（2012年11月14日転載許可）。

人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館　総合展示第4室「列島の民俗文化」（常設展示）
（2013年3月19日～）

上記常設展示に展示予定のアチック写真（目録番号　ア-12-36、ア-56-21、ア-63-14、ア-78-12、ア-78-19、河岡1-6-6、河岡1-6-14、河岡1-6-15、河岡1-29-3-3、河岡1-29-14-1、河岡1-29-25-26）、並びに『アチック写真　vol.6』の「アチックフィルム（16ミリフィルム）写真」（92頁）の複写寄贈（2012年8月31日寄贈）。

◆ 2013 年度

国立歴史民俗博物館　歴博映像祭『映像民俗学の先駆者たち―渋沢敬三と宮本馨太郎』（2013 年 7 月 18 日）

上記イベントへの動画利用対応。8 月 12 日、ポスター写真利用対応。8 月 22 日、展示用写真および図録掲載写真の貸し出し。

国立民族学博物館　特別展『屋根裏の博物館』（2013 年 7 月 23 日）

上記イベントで展示用写真および図録掲載写真の貸し出し。

渋沢史料館　渋沢敬三没後 50 年企画展『祭魚洞祭』（2013 年 8 月 12 日）

展示写真および図録掲載写真の貸し出し。

毎日新聞社『毎日小学生新聞』（2013 年 10 月 11 日）

掲載用写真の提供。

青弓社（2013 年 10 月 25 日）

丸山泰明氏の著作に使用する写真の提供。

（泉水　英計）

2）プロジェクト型共同研究の推進　業務報告

本機構の目的は、神奈川大学日本常民文化研究所と非文字資料研究センターの所蔵する史資料とデータベースを、広く学外の研究者に公開・共有化し、さらに研究分野を拡大、深化させることにある。その中の第 2 業務である「プロジェクト型共同研究の推進」の目的は、共同研究の推進にある。そのために本機構では、次の 5 つのプロジェクトを立て、研究課題を公募して共同で研究を進めてきた。第 2 業務の活動について、2009 年度から 2013 年度にわたり総括的にまとめる。

2009 年度に公募した研究課題は、以下の 5 つの課題である。

P1　海域・海民史の総合的研究

P2　民具資料の文化資源化

P3　非文字資料（図像・身体技法・景観）の体系化

P4　映像資料の文化資源化

P5　常民文化資料共有化システムの開発

それに対しての応募があり、表 1 のプロジェクトを採用した。

P1 の「海域・海民史の総合的研究」は、日本常民文化研究所の一つの大きな研究課題である海の文化を基調とし、それに対して歴史学をはじめ民俗学、地理学など学際的な視点から研究を推進する必要があり、3 つのプロジェクトが採用された。P1-1 は、これまで日本において個人・地域・国のレベルで膨大に蓄積されてきた漁場利用の技術や知識（社会知・民俗知・文字知も含む）について、その実態と歴史的推移を明らかにするとともに、漁場利用の社会経済的・歴史民俗的意義について学際的な検討を行うことが主要な目的となる。P1-2 は、日本列島周辺海域における「魚と人の関わり」に関して歴史的・地理的・民俗的特質を海域の視点から総合的に解明することを課題としている。P1-3 は、伝統船舶の製作やその操船術・航海術に関する学術調査の蓄積の上に立ち、先住民文化復興の一貫として再構築されてきた現代のカヌー製造技術や航海術が、環太平洋の

表１　2009 年度採用公募プロジェクト

共同研究グループ番号	課　題　名	研究代表者及び共同研究者・研究協力者
P1-1	漁場利用の比較研究	田和正孝ほか 4 名
P1-2	日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究	伊藤康宏ほか 10 名
P1-3	環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究	後藤明ほか 13 名
P2-1	民具の名称に関する基礎的研究	神野善治ほか 15 名
P2-2	東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史	角南聡一郎ほか 10 名
P3-1	アジア祭祀芸能の比較研究	野村伸一ほか 16 名
P4-1	アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象	高城玲ほか 6 名
P5-1	第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学	泉水英計ほか 12 名

住民の中にどのように伝授・教育されてきているのかを、近年の先住民運動との関連で実証的に捉え、日本各地で試みられている伝統的船舶の復興建造も先住民運動のような国際的な脈絡で位置づける。

P2 の「民具資料の文化資源化」も、日本常民文化研究所の 2 つ目の大きな研究課題である物質文化に関する研究である。P1-3 は、船という物質文化を対象に、前研究課題である海の文化と民具資料の二つの領域に関わる研究プロジェクトと位置付けることができる。さらに、P2-1 は個別民具の研究ではなく、民具名称について全国的な比較を行い、壮大なデータベースの構築を目指すプロジェクトで、日本においては唯一の研究データベースとしてその成果が期待される。P2-2 は、物質文化の国際比較を課題としており、渋沢敬三が志した常民文化の国際比較を展開することになる。まさに、国際常民文化研究機構の一つの眼目である、国際研究を展開する。

P3 の「非文字資料（図像・身体技法・景観）の体系化」は、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」からその後継組織である非文字資料研究センターの中心的課題である。今回は、この領域から P3-1「アジア祭祀芸能の比較研究」プロジェクトを採択し、中国・韓国・日本の研究者が、それぞれの地域における民俗芸能を実地調査し、その芸能の映像などを非文字資料として比較研究を行った。

P4 の「映像資料の文化資源化」は、日本常民文化研究所に所蔵されている戦前の映像や写真をアチックフィルム・写真として記録化して、その研究を推進する目的で構成された。それら資料の記録化は、第 1 業務として行われた。P4-1 プロジェクトでは、国内では薩南諸島の十島村に出かけ、昭和 10 年前後に撮られた映像・画像の小冊子を作成して、それを現地の人たちに配布したり、映像の上映会を実施して情報の聴取に努めた。海外では、台湾の屏東におけるパイワン族の映像と画像を現地に持参して、同様のフィールドワークを行った。韓国では、木浦大学校島嶼文化研究院と合同で多島海での調査を実施した。

P5 の「常民文化資料共有化システムの開発」では、日本常民文化研究所に保管されている多くの資料の活用化を目指した。P5-1「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」のプロジェクトでは、民族学振興会資料の調査を行った。民族学振興会およびその前身の民族学協会は、1934 年に設立された日本民族学会（現在の日本文化人類学会）と連携し、エスノグラフィーに基礎を置く学術研究の組織的活動を支えてきた。1999 年の解散にともなって、その所蔵資料は神奈川大学日本常民文化研究所に寄贈されている。その資料は、学会活動を裏付ける資料として貴重であるが、解読は未だ手つかずの状態である。これを研究者が利用可能な形態に整え、これを活用して主に第二次大戦から占領期の民族学・文化人類学の変遷を明らかにすることが P5-1 のプロジェクトの目的となっている。

さて、これらの研究プロジェクトの計画は、2009 年度から 2011 年度までの 3 年間を調査・研究時期、2012 年度と 2013 年度の 2 年間は研究成果発表の時期と位置付けた。前期の調査・研究時期の活動は、『年報』の 1 号から 3 号に掲載されているのでここでは詳しくは述べない。ただ、全体としてはのべ 195 回の調査が実施され、57 回の研究会が開催された。

後期の研究成果発表については、成果発表会を公開で行うことと成果報告書を刊行することを各プロジェクトに要請した。その内容は、以下の表 2、3 の通りである。

本機構の公募プロジェクトとしては、2009 年度から 8 つのプロジェクト・チームが活動していたが、途中から新規プロジェクトの採用を行い、以下のプロジェクト（表 4）が採用された。

表 2　公開成果発表会

共同研究グループ番号	タ　イ　ト　ル	開　催　日
P1-1 P1-2	「魚と人の関係史―『漁場利用』班と『水産史』班の合同成果発表会―」	2014 年　2 月 15 日
P1-3	「南と北の舟―日本列島の船造りの多様性のルーツ―」	2013 年　2 月 16 日
P1-3 P2-1	「日本の船―技と名称―」	2013 年　2 月 16 日
P2-2	「人・モノ・情報の交錯におけるダイナミズム ―東アジアの物質文化からみた普遍性と独自性―」	2013 年 11 月 23 日
P3-1	「海を越えての交流―民俗、祭祀、芸能の面から―」	2012 年　9 月 15 日
P4-1	「ビジュアル資料と渋沢敬三―アチックフィルム・写真からの展望―」	2014 年　2 月 22 日
P5-1	「ミンゾク研究の光と影―近代日本の異文化体験と学知―」	2012 年 12 月　9 日

表 3　成果報告書

共同研究グループ番号	タ　イ　ト　ル	発　行　日
P1-1	国際常民文化研究叢書 1 ―漁場利用の比較研究―	2013 年　3 月 1 日
P1-2	国際常民文化研究叢書 2 ―日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究―	2013 年　3 月 1 日
P1-3	国際常民文化研究叢書 5 ―環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究―［映像記録 DVD 付］	2014 年　3 月 1 日
P2-1	国際常民文化研究叢書 6 ―民具の名称に関する基礎的研究―［民具名一覧編］ 国際常民文化研究叢書 9 ―民具の名称に関する基礎的研究―［地域呼称一覧編］	2014 年　3 月 1 日 2015 年　3 月 1 日
P2-2	国際常民文化研究叢書 3 ―東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史―	2013 年　3 月 1 日
P3-1	国際常民文化研究叢書 7 ―アジア祭祀芸能の比較研究―	2014 年 10 月 1 日
P4-1	国際常民文化研究叢書 8 ―アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象―［資料編］ 国際常民文化研究叢書 10 ―アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象―［論文編］	2014 年　3 月 1 日 2015 年　3 月 1 日
P5-1	国際常民文化研究叢書 4 ―第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学― 国際常民文化研究叢書 11 ―「民族研究講座」講義録―	2013 年　3 月 1 日 2015 年　3 月 1 日

表４　新規課題公募プロジェクト

研 究 期 間	課　　題　　名	研究代表者
2011 年度～2012 年度	「奥能登における真言宗寺院の年中行事を中心とした民俗調査 ―町野結衆寺院を事例として―」	畠山　聡
2012 年度～2013 年度	「南西諸島における海事文化の歴史的展開と現状」	板井英伸
2013 年度～2014 年度	「明治農具絵図・関連文書群の全国捜査」	桂　真幸

以上のように、2009 年度から５年間にわたり８つのプロジェクトが遂行され、それぞれが公開研究会を行い、研究成果報告書が８冊刊行された。2015 年には、さらに３冊刊行される予定である。のべ 94 人の研究者がこのプロジェクトに加わり、本機構を中心として研究ネットワークが形成された。このネットワークは、新規採用の３プロジェクトも加わることによって、さらに拡大することができた。

これらのプロジェクト型共同研究は、2009 年度から５年間で一応の成果を出し、終結することができたと評価できる。しかし、この共同研究の推進を通して形成された研究ネットワークを継続する必要がある。このネットワークは、国内だけでなく海外の研究者とも形成されている。それは、第３業務の国際シンポジウムを通した国際ネットワークとも重なる部分を有している。

今後は、国際常民文化研究機構を核として、新たなプロジェクト型研究を公募して継続していくが、それは今まで築き上げた研究とネットワークを生かして、拡大するという形で展開していくことになる。

（小熊　誠）

３）事業運営の総合的推進　業務報告

共同研究拠点事業としての最終年度である 2013 年度は、５年間の事業を総括し、新たな研究視角を確立するための取り組みを進めた。

○会議の開催

機構運営委員会３回・学内運営委員会９回を実施した。2009、2010 年度の予算執行に関する問題については、調査結果を運営委員会に報告し、再発の防止策について検討した。

○国際シンポジウムの開催

第１回「海民・海域史からみた人類文化」、第２回「“モノ”語り―民具・物質文化からみる人類文化―」、第３回「“カラダ”が語る人類文化―形質から文化まで―」、第４回「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」につづき第５回「渋沢敬三の資料学―日常史の構築―」を開催し、国内外の研究者との討論により、渋沢敬三が提起した資料学の可能性について総合的に検討した。また、共同研究者あるいは研究機関相互の討議・交流の場とするため、積極的に参加を呼びかけた。国際常民文化研究機構の５年間の事業についての総括的な意見が多く出され、参加者はこれに関するコメントを国際常民文化研究機構のウェブサイト上に順次公開を始めている。

○海外研究機関とのネットワーク形成

台湾海洋大学、台北師範大学、台北芸術大学、成功大学とは学術交流のための予備会議を６月に行い、今後の学術交流の方向性について検討した。研究拠点の国際ネットワークの形成と強化のため、上海海洋大学が開催する研究シンポジウムに研究者を 12 月に派遣し成果を報告した。

なお、2013 年度においては、木浦大学校との学術交流は実施できなかった。これも 2014 年度の事業として本学の責任において実施予定である。

○公開研究会

2009 年度より継続している「共同研究」の方法についての公開研究会を引き続き行い、5 月に「「山村調査」追跡という共同研究」（講師：田中宣一）を開催した。

○ウェブサイトの整備

中国語サイト・韓国語サイトを整備し、2 月より公開を開始した。初年度からの継続業務として、適宜機構の活動状況を報告した。

以下、2009 年度から 2013 年度の「事業運営の総合的推進」業務の概要をまとめる。

○事業運営の総合的推進業務　2009 年度～2013 年度の業務一覧

表 1　運営委員会

回	日　時	場　所	主 な 内 容
第 1 回	2009 年 8 月 3 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	運営委員会規程、委員長選出他
第 2 回	2009 年 11 月 14 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	事業計画、国際シンポジウム、学術交流他
第 3 回	2010 年 2 月 20 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	事業計画、年報、学術提携覚書他
第 4 回	2010 年 3 月 27 日	横浜キャンパス 16 号館視聴覚ホール B	平成 22 年度事業契約他
第 5 回	2010 年 6 月 20 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	共同研究交付申請、国際シンポジウム他
第 6 回	2010 年 9 月 25 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	5 か年事業計画、リポジトリ登録他
第 7 回	2011 年 4 月 23 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	運営委員会規程改正、事業契約、交付申請他
第 8 回	2011 年 9 月 24 日	横浜キャンパス 1-401 会議室	共同研究成果報告他
第 9 回	2012 年 3 月 9 日	横浜キャンパス 1-301 会議室	平成 24 年度事業計画、新規共同研究者公募他
第 10 回	2012 年 4 月 21 日	横浜キャンパス 16 号館第 2 会議室	新規共同研究者公募他
第 11 回	2012 年 11 月 2 日	横浜キャンパス 1-301 会議室	成果報告書他
第 12 回	2013 年 3 月 16 日	横浜キャンパス 1-301 会議室	平成 25 年度事業計画他
第 13 回	2013 年 5 月 25 日	横浜キャンパス 1-301 会議室	国際シンポジウム他
第 14 回	2013 年 11 月 16 日	横浜キャンパス 1-308 会議室	運営委員長交代、事業計画変更他
第 15 回	2014 年 3 月 1 日	横浜キャンパス 1-301 会議室	事後評価、再認定申請他

表 2　国際シンポジウム

回	テ　ー　マ	日　時	場　所
第 1 回	海民・海域史からみた人類文化 国際シンポジウム「漂うクジラ —“ヒト”・“カミ”・“自然”共生の試金石—」 個別報告「海民社会と漁業 —東アジア世界から—」	2010 年 3 月 27 日・28 日	横浜キャンパス 16 号館 セレストホール
第 2 回	“モノ”語り —民具・物質文化からみる人類文化— 公開研究会「民具の文化資源化 —“モノ”研究の新たな挑戦—」 国際シンポジウム 「“モノ”と“ヒト”の人類文化史」	2010 年 12 月 11 日・12 日	横浜キャンパス 16 号館 セレストホール
第 3 回	“カラダ”が語る人類文化 —形質から文化まで— 国際シンポジウム 「非文字資料としての身体（カラダ） —“カラダ”で読む・表す・伝える—」 公開研究会「海の民俗伝承と祭祀儀礼 —船による神の来往と身体表現—」 パフォーマンス「韓国巫女による竜王祭・ 刀上舞・神将舞の上演」	2011 年 12 月 10 日・11 日	横浜キャンパス 16 号館 セレストホール

回	テ　ー　マ	日　　時	場　　所
第４回	二つのミンゾク学 ―多文化共生のための人類文化研究― 国際シンポジウム「民族の交錯 ―多文化社会に生きる―」 公開研究会「ミンゾク研究の光と影 ―近代日本の異文化体験と学知―」	2012 年 12 月　8 日・ 9 日	横浜キャンパス 16 号館 （8 日） 視聴覚ホール B （9 日）
第５回	渋沢敬三の資料学―日常史の構築―	2014 年　3 月　9 日	横浜キャンパス 16 号館 視聴覚ホール B

表３　学術交流

交 流 校 名	日　　時	概　　要
上海海洋大学	2009 年 11 月 20 日	海洋文化研究における交流を促進するため協定覚書に調印
中国海洋大学	2009 年 11 月 24 日	海洋文化研究における交流を促進するため協定覚書に調印
釜慶大学校	2009 年 12 月 25 日	常民文化研究における交流を促進するため協定覚書に調印
慶北大学校	2009 年 12 月 28 日	常民文化研究における交流を促進するため協定覚書に調印
上海海洋大学	2010 年 12 月 17・18 日	上海海洋大学の国際シンポジウムに参加
上海海洋大学	2011 年　3 月 7 日～ 9 日	上海舟山列島の共同調査
木浦大学校	2011 年　4 月 1 日	島嶼および海洋文化研究における交流を促進するため協定覚書に調印
上海海洋大学	2011 年 12 月 16・17 日	上海海洋大学の国際シンポジウムに参加
木浦大学校	2012 年　2 月 12 ～ 16 日	多島海においてかつて渋沢敬三が行った調査の追跡調査を実施
上海海洋大学・木浦大学校	2012 年　3 月 12 ～ 15 日	瀬戸内海・二神島において、日本常民文化研究所、上海海洋大学、木浦大学校の研究者と共同調査
上海海洋大学	2012 年 11 月 2・3 日	上海海洋大学の国際シンポジウムに参加
木浦大学校	2012 年 11 月 16・17 日	木浦大学校と比較民俗学会の共催による国際シンポジウムに参加、「東アジア島嶼海洋文化フォーラム」の設立について意見交換
木浦大学校	2013 年　1 月 10 ～ 12 日	木浦大学校の史資料整理検討会に参加
台湾海洋大学・台北師範大学・台北芸術大学・成功大学	2013 年　6 月 3 ～ 5 日	台湾の４つの大学を訪問、学術協定について意見交換
上海海洋大学	2013 年 12 月 7・8 日	上海海洋大学の国際シンポジウムに参加

表４　公開研究会

講演名・講師	日　　時	場　　所
「渋沢敬三と共同研究」佐藤健二	2010 年　2 月 20 日	16 号館第 3 会議室
「柳田国男と全国山村調査」由谷裕哉	2010 年　6 月 20 日	17 号館 215 教室
「和歌森太郎の民俗学―民俗総合調査を中心に―」柏木亨介	2010 年　9 月 25 日	1 号館 804 会議室
「「歴史知識学」の創成研究：歴史知識の発見・発信研究」石川徹也	2011 年　2 月 17 日	16 号館第 3 会議室
「共同研究とエクスペディション―梅棹忠夫における知識編成の仕掛け」飯田卓	2011 年　4 月 23 日	1 号館 308 会議室
「「寄り合い」と朝鮮戦争―宮本常一の九学会連合対馬調査をめぐって」坂野徹	2011 年　9 月 24 日	16 号館視聴覚ホール B
「大学共同利用機関と共同研究―問題発見型と問題解決型の共同研究をめぐって―」篠原徹	2012 年　3 月　9 日	1 号館 308 会議室
「折口信夫歌舞伎絵葉書コレクション」齋藤しおり	2012 年　4 月 21 日	16 号館視聴覚ホール B
「Suye Mura と Village Japan―英語圏人類学における２つの古典的日本村落研究の比較から学ぶもの―」桑山敬己	2012 年 11 月　2 日	1 号館 308 会議室
「台湾における原住民の物質文化研究について―1895 年以降現在まで」 王嵩山「台湾における民俗系博物館の現状と問題」黄貞燕	2013 年　3 月 16 日	1 号館 308 会議室
「「山村調査」追跡という共同研究」田中宣一	2013 年　5 月 25 日	1 号館 308 会議室

（佐野　賢治）